

(六)

二千四百年前・佛教誕生の地

インドブツダガヤに建立された

印度山日本寺での第二回目

曹洞宗国際坐禅会と第三十六回目

日本寺国際佛教徒結集に出講、十日間滞在す。



日本ではお釈迦様は紀元前四六三年に現在のネパール国

生れで二十九歳で妻子をお城に残して、王子としての身分をすてて、世の人々が生老病死の苦悩から解脱することを願

い、六年間にわたる苦行修行の末に、インド・ブツダガ

ヤに到り村娘のスジャータによる乳粥の供養を受けて生氣を取りもどし、悟りを開くまでは決して坐より立たずとの

決意の下に、菩提樹下での坐禅、禅定に入り、十二月八

日、三十五歳にして明けの明星のきらめきと共に大悟し、「有情非情同時成道」と宣言し、ついに悟れる者・覚者・

佛陀となった。其後初めての法輪を転ずる、初説法から、インドのガンジス河流域を説法行脚、遊行、修行生活を続

けること四十五年間、八十歳にしてインド・クシナガラ

の沙羅双樹林の中で落葉を集めた俄作りの床の上で北枕にされ同行の弟子達に見守られて逝去されたのは紀元前三八三

年のこととされている。佛陀・お釈迦様・釈尊などと尊称される佛教の開祖・ゴータマブツダ・釈迦は歴史上の人物にして紀元前四六三年から三八三年までの八十年間にわた

る生涯であり、現在から二千四百年前の方であります。日本では昔から四月八日にお釈迦様がルンビニの花園で生れた時には天から甘露の雨・甘茶が降りそそいで、生れたばかりのお釈迦様は天上と天下、右手で天を左手で地を指さして「天上天下唯我独尊」と宣言して七歩あるいたとの故事が長年語りつがれており、甘茶を飲んで次のような花祭行進曲を歌って稚児行列と白象の背に誕生佛をのせての行進は松本の人なら見たこともある春の風物詩となっている。

(一)昔も昔 三千年 花咲き匂う春八日 ひびきわたあつ

た一声は天にも地にもわれ一人。

(二)立派な国に生れ出で、富も位もありながら、一人お城をぬけ出て、六年にあまる御修行。

(三)まるい世界のまん中で、教えの門を打ち開き、渴ける

人にふりまいた甘露の水は限りなし

(四)何年たっても変らずに、咲いままなる法の花、きれいな一つを胸にさし、我等も負けずにはげみましょう。

さて、この釈尊・お釈

迦様が悟りを開かれた成

道の地、インドのビハール州・ブツダガヤは佛教最高の佛跡聖地であり、二〇〇二年には世界遺産



に登録され、今やインド国内はもとより、スリランカ・タイ・ミャンマー・ブータン・チベット・中国・ヴェトナム・カンボジア・ネパール・ラオス・等々の近隣佛教諸国からの巡拝参拝団から欧米諸国からの旅行者が年々増加して、三十年も昔にはじめて佛跡巡拝に來た時とは雲泥の差で正に人間参集の展覽会場と言った、インド的混沌こんとんと清濁せいだくの場所となつてゐることは日本人の仏跡巡拝旅行者の激滅的傾向も見られたりで、正に諸行無常の様相を示している。これまでに訪印して佛陀生誕の地・ルンビニ（ユネスコにより一九九七年世界遺産に認定登録され、大規模な整備事業が進行中）、成道の地・ブツダガヤ、初転法輪の地・サルナートろくやおん鹿野苑、入滅の地・クシナガラろくやおんの四大佛跡を巡拝された方も出来るならば、是非再訪して發展するインドと混乱の度深まるインドを実地体験してほしいと願うものです。不肖私は学生時代には行きたくても夢物語の如くであり、三十路になつてはじめて後に駒沢大学学長になられた水野弘元先生を団長にお願いして一行七人でインドと当時はセイロンの国名であった現在のスリランカへ十日間程二度目の海外旅行をする機会を得られた。（一回目の海外旅行は昭和39年東京オリンピック大会の年に全国の中、高、大学生一般より十万余の応募者中より五人が選考されて晩秋、欧州数ヶ国へ学生親善使節団、副団長と



2011/12/04

して旺文社による丸ががえの派遣旅行であつた。当時私は駒沢大学大学院在学中で26歳であつた。一その後何度か機会を与えられて、出張派遣、自弁による旅行、郵便局による積立旅行会などで、アジア佛教諸国からハワイ・北米・南米・欧州・豪州等へ研修、会議、法要行事、国際布教で出講等々の名目でこれまでに五十回近く国外に出ることになり、その

昔、昭和二十年代から三十年代に至るまで山寺の小僧が長年日夜夢想した海外旅行も近頃では簡単に実現するようになり、平成二十二年度中は五回、今年はこれで三回目の国外で、寺を留守にする日数は全部で15日間程であり、檀家の皆々様をはじめ、留守部隊長の家内や副住職夫婦に深謝するのみです。何も外国へ遊覧観光旅行に行くわけではなく、アメリカの禅宗寺での法要行事と隣国・韓国に残存している旧曹洞宗寺院の調査に出向してとんぼ帰り（寺報第92号8〜10頁参照）。今回は十一月三十日深夜

早朝一時前に羽田空港よりタイ国・バンコック経由でインド・ブツダガヤに昭和三十八年頃より日本の佛教界が佛陀成道の地に日本寺を建設する大願を成就



印度山日本寺の納骨堂・鐘樓と本堂の光景

するべく尽力し、昭和四十八年十一月～十二月に、国際佛教興隆協会による開山入佛式からほぼ連日にわたり日本佛教各宗派による落慶々讚法要が厳修された印度山日本寺に到着して、十二月一日より九日まで、第二回目曹洞宗国際坐禅会に出講中です。

昨年（平成二十二年十一月八日～十八日迄）には第一回日の曹洞宗坐禅会が共練会とも称して日本寺周辺に集る外国人旅行者や日本人を対象にして開催されたが、その機縁は東京にある印度山日本寺の本部国際佛教興隆協会の部長にしてインド現地法人・インド国際佛教興隆協会事務総長、大工原彌太郎師が、「毎年臨済宗の方々が日本寺に来て坐禅会のような事をしているので、曹洞宗でもやってもらえないか？」との思いを協会の評議員であり、昭和55年夏より57年暮までに日本寺駐在僧であった、塩尻市洗馬小曾部の興龍寺住職・洞派信隆師に五～六年も前から打診し、洞派師の御長男で副住職の正信師が平成二十二年夏から日本寺駐在僧として渡印したので、これを機会にインドの日本寺で曹洞宗坐禅会をとの計画が具体化し、洞派師は「インドのヒンディー語なら日常会話ぐらい何とかなるが、英語で曹洞宗のことを話してくれるのは、廣澤寺の方丈だ」と白羽の矢が飛びこんで来た上に、松本まで出向いて下された大工原師と共に松本市内のホテル花月で面談して、御二人より強力に要請されて平成二十二年十一月に十二日間、六千坪余りの日本寺境内の会館に滞在して連日

十数人余りの参加者と坐禅と英語による説明や講話を続けたが、協会から「曹洞禅セッション（開会中の意）の坐禅講師を委嘱する」との委嘱状が配送されていたことであつた。期間中一日は放参（休み）にして、十数人で佛陀の高弟にして後継者となつたマハーカーサパ（摩訶迦葉大和尚）入寂の地とされるククパタギリ（グルツパ鶏足山）に昇る修行をしたがかなりの難行だつた。

以上述べて来た報告、記録はいささか二年にわたるもので混乱気味なれど、前回に続いて、今年、平成二十三年度は十二月一日から九日まで、第二回目の曹洞宗坐禅会への出講と十二月八日、成道会（しょうどうえ）に行う第36回国際佛教徒結集における



国際佛教会館内の居室に10日間滞在。



日本寺境内は外部とは別世界の如き状況と言えよう。

十二月一日〜九日までの日程表

日程表	
4:30 am	起床・洗面
5:00 am	唯天坐禅
5:30 am	朝歩の拝 (朝の挨拶)
6:00 am	朝のお勤め (本堂にて読経)
7:00 am	朝食 (坐禅堂にて食事)
8:00 am	坐禅堂清掃・休憩
9:00 am	坐禅
10:00 am	↓
3:00 pm	
3:00 pm	お茶の時間
4:00 pm	坐禅
5:00 pm	夕方のお勤め (本堂にて読経)
6:00 pm	夕食 (坐禅堂にて食事)・休憩
7:00 pm	坐禅
↓	
7:30 pm	小笠原先生による講義
9:30 pm	就寝

Daily routine schedule	
4:30 am	Wake up bell
5:00 am	ZEN meditation program
5:30 am	Greeting of morning time
6:00 am	Morning service (Chanting at Main hall)
7:00 am	Breakfast at Meditation hall
8:00 am	Clean up of meditation hall, Rest
9:00 am	ZEN meditation program
10:00 am	↓
3:00 pm	
3:00 pm	Tea time program
4:00 pm	ZEN meditation program
5:00 pm	Evening service (Chanting at Main hall)
6:00 pm	Evening meal at Meditation hall
7:00 pm	ZEN meditation program
↓	
9:00 pm	Dharma talk by Rev. Ryugen Ogasawara
9:30 pm	Retire to sleep

基調講演をするようにとの二枚もの委嘱状と、協会の理事長である奈良・薬師寺管長の安田映胤師からも直接電話があり、成道会法要の導師をしてくれとの要請で十一月中は講筵の原稿作りやら、衣・袈裟の用意とかで苦勞し、十一月二十九日に責任役員会議後二十二人の御来山、出席による常任総代会終了後、寺から羽田空港まで荷物共々送ってくれる中央タクシー(代金八千二百円)であわただしく出発し深夜暗やみの中で搭乗のタイ航空機は十二時四十五分離陸、バンコックで乗り換えて、九時間あまりの飛行で天竺・インドのガヤ空港に安着した。日本に佛教伝来以来、千二百年間も天竺に行くことは日本の仏教者にとっては不可能であり、道元禪師は中国に四年余り留学求法の滞在は出来たが天竺までは及ばなかった。日本の佛教界の人々が天竺・インドの佛跡巡拝が出来るようになったのは明治維新後のことであつても、極く限られたもので、日本からの佛跡巡拝が可能になつて一般化したのは昭和三十年頃から

写真右は開講式後に日本寺本堂前にて写す。六ヶ国の参加者達。



かと思う。そして「入竺沙門〇〇」などと自称した長老僧がいたので不肖私は「入竺中韓亜欧北南米豪沙門 龍雲山僧 隆元」などと寿限無ばりの自称に師友に笑われている次第であります。
(以上、インド日本寺の18号室にて十二月五日までに記)

下の写真は禅寺の朝食・お粥を食べる「応量器・おうりょうき」と言う食器と箸、匙、刷(せつ)、布巾(ふきん)など一式を包むもの。今回は木曾で二十人分を作成してインドへ持参。





お粥、漬物、黒ごまの三種の朝食が順次給仕人(=浄人)により配られる。



お粥の上に右端の黒ごまがふりかけられた状態。



黒ごまのかわりに白ごまがかけられて食べすすめられた状態



日本から持参した出川の丸正のかけ醤油をかけてみる。

日本の曹洞宗の食事作法はまことになれるまで大変なもので、インドの日本寺で外国人にやらせるのは最初心配したが、皆よろこんで挑戦してくれた。何事もなせばなる!!



ようやく食前の経文を唱え終わって、熱かったお粥も食べごろになって木の匙で食べはじめ。



まことに面倒な応量器の使い方に、外国人参加者は見よう見まねで挑戦して9日間、終生忘れられない経験だと言う。



この上、2枚の写真は夕食の写真です。皿のカレーと水のみです。



この上下2枚の写真は、期間中日本寺で出された昼食ですが講師用です。



毎朝四時半起床、五時より坐禅、六時より本堂で朝課後、七時より再度坐禅堂にもどり各自応量器をひろげて、給仕をしてくれる興龍寺方丈と二人の直弟子が交互に浄人じやうにんとなつて熱いインド米のお粥から配り、食事の偈文を唱えて食べるまでに結構、時間を要するが、最後にお粥の入っている頭鉢ずはつを両手の三本指で目の高さぐらいまでささげて一口食べて一切の悪を断じ、二口食べては一切の善を修行し、三口食べては一切の衆生をすくわんとし、皆共に佛道を成しとげん、との偈文を唱えてようやく食べはじめる（10ページの写真参照）



興龍寺・洞派信隆方丈と二人の直弟子。



朝の坐禅後、朝参の拝を行う。



日本寺の現地要員スタッフ諸氏
正面方丈の左は事務長のロブサン氏
施療院や菩提樹学園の要員を含めると40~50人にもなる



本堂で朝課後、しばし説明、経典解説。



昨年と今年もククパタギリに登られたアーナンダ比丘と。

私達が十日間あまり、日本寺に滞在中、日本からの巡拝団はなかったかと思うが、十二月七日に日本保育連盟の方々が十名程、菩提樹学園保育・幼稚園との交流視察研修に見えられ、その中に高崎市常仙寺住職にして育英短期大学教授、佐藤達全師がおられてしばし懇談、日本ではあまりお互いにお目にかかれないのにインドで相見出来るとは正に好因縁でした。



平成23年12月5日、5日間参加したフランスの若者二人がインド遊行の為に出発。右端は全日参加のドイツ人女性ペトラさんと成田梨佳さん。